

## 第3章 石障系石室と箱式石棺

古城 史雄

### はじめに

高木恭二氏や高木正文氏の研究により、肥後において、最古段階の横穴式石室が存在する地域が、八代海沿岸であることがわかってきた〔高木恭 1994, 高木正 1999〕。そのほとんどは玄室内の周壁に板石をめぐる石障をもつ石室である。

高木恭二氏は、石障系石室である小鼠蔵1号墳の石室壁体に用いられた安山岩と水俣市周辺の地下式板石積石室墓に用いられた安山岩が同じものであることを示し、石障系横穴式石室と地下式板石積石室墓の間には密接な関係があるとした。石障発生の要素を地下式板石積石室墓の周壁の板石に求め、穹窿状の天井とともに地下式板石積石室墓と竪穴式石槨に起源があるとした〔高木恭 1994〕。また石室に使用される石材に着目し、地域最初の石障系石室の石材は必ず混在使用となり、最後段階の石室では殆ど1種になることを示し、当初の石室構築は、石材を供給する集団によってなされるので、地元石材と供給された石材が混在し、その後地元石材の使用割合が高まり、最終的には地元石材だけで構築されるとした〔高木恭 1999〕。

一方杉井健氏は、砂岩をていねいに加工して組み合わせる千崎型箱式石棺<sup>(1)</sup> (図2-2)の造作は石障の造作と共通するとし、初期の石障と地下式板石積石室墓の基底部をなす板石のあいだには、解消しがたい懸隔があることから、石障の起源については、地下式板石積石室墓よりも千崎型箱式石棺との関連を検討した方がいいのではないかという提言をおこなっている。また最古の石障系石室とされる小鼠蔵1号墳の石室と次段階の大鼠蔵尾張宮古墳の石室のあいだにはスムーズな型式変化ではとらえきれない相違があることを指摘している〔杉井 2009〕。

確かに杉井氏の指摘どおり石障の加工技術は、千崎型箱式石棺の加工技術と共通する。しかしその技術が最初に出現するのは箱式石棺なのか、あるいは石障系石室なのかが問題である。八代市の大鼠蔵古墳群や小鼠蔵山古墳群は、頂部に石障系石室が位置し、その周辺に箱式石棺が位置することから、石障系石室が先に

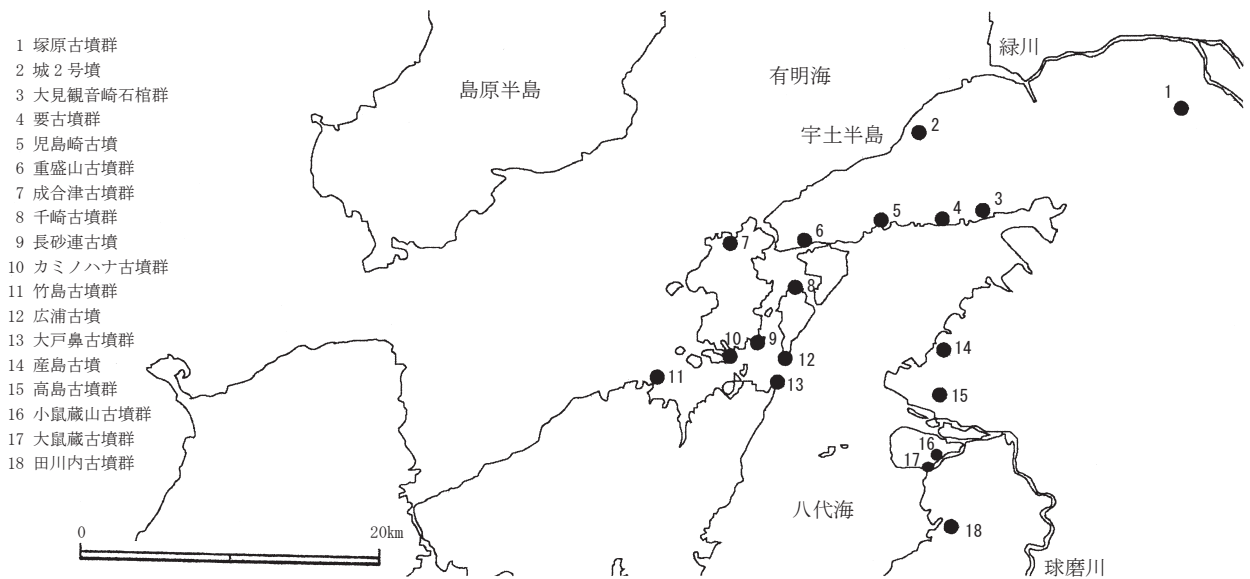


図1 八代海周辺の関連古墳分布図

存在した可能性があり、石障の加工技術が箱式石棺に応用された可能性があるからである。

筆者も小鼠蔵1号墳と次段階の大鼠蔵尾張宮古墳や大戸鼻北古墳石室の変遷は、大きな隔たりがあるとの認識はあったものの、高木氏の石材使用の論点〔高木恭1994・1999〕や、石障系石室の穹窿形天井についても、高木氏同様、地下式板石積石室墓に起源があると考え、小鼠蔵1号墳を最古の石障系石室と位置づけてきた。一方で、熊本市城南町塚原古墳群内のりゅうがん塚古墳、將軍塚古墳の出現過程について、現在の石障系石室の変遷の中では説明出来ないことが気になっていた。また千崎古墳群において横穴式石室が発見された。その構造は、長方形プランで、羨道と玄室床面の段差は殆ど無いなど構造は特異で、やはりこれまでの変遷の中では説明出来ないものであった。

そこで、千崎型箱式石棺の出現時期を検討することに加え、小鼠蔵1号墳の問題点を再度整理するとともに、改めて石障系石室の成立について検討してみたい。

## 1 石障系石室と千崎型箱式石棺出現時期の検討

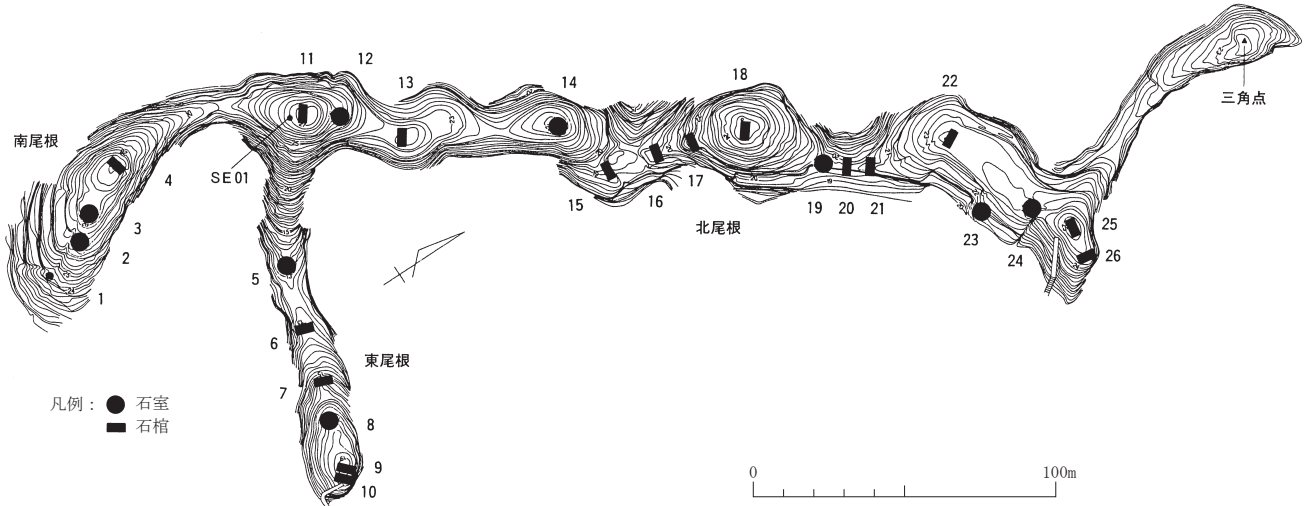
箱式石棺から遺物が出土する例は少ないので、併せて古墳群内における石棺の立地からも検討する。同一古墳群内であれば、石棺の分布から先後関係を推測することは可能であり、その古墳群の中に溝状加工を施すものと施さないものが含まれている場合や、全てに加工を施されないもので構成されている場合等の事例を多く検討することによって千崎型箱式石棺の加工技術の出現の時期を追えると考えられるからである。

しかし実際作業をはじめてみると、古墳群の全体像がわかるものは殆どなく、千崎古墳群や大鼠蔵古墳群、小鼠蔵山古墳群である程度の検討が出来るくらいであった。その他宇城市の大見観音崎石棺群、要古墳群、重盛山古墳群の立地状況を参考とした。

### (1) 千崎古墳群

上天草市維和島の北部に位置し、海に突出した岬に立地する。11号墳のある頂部を分岐点として3方向にのびており、南尾根、東尾根、北尾根と呼称されている（図2-1）。そこに26基からなる古墳群がある。箱式石棺・横穴式石室で構成され、12号墳や15号墳は石棺系石室の可能性が高い。石材は砂岩製が殆どだが、安山岩を主体としたもの（25・26号墳）や、部分的に安山岩を使用したもの（10号墳）がある。多様な構成である。古墳の分布は、頂部に箱式石棺があり、裾部に横穴式石室が位置することから、まず箱式石棺が築造されその後横穴式石室が造られたと思われる。ただし横穴式石室の可能性が高い7号墳が築造された後、箱式石棺である6号墳が作られており、横穴式石室出現後に完全に石棺から石室に置き換わる訳でもないようである。また箱式石棺に溝状の加工を施す技術が当初から存在したかどうかは、頂部の箱式石棺の詳細が不明であるが、9号墳10号墳に認められることから比較的早い段階から存在したようである。また立地からは横穴式石室と箱式石棺には特段の階層差はなかったと考えられる。

一方横穴式石室の可能性が高い7号墳について、報告書の所見に基づき加筆（斜線部）したものが図2-3である〔前田2006〕。この想定が正しいなら7号墳は竹島3号墳に類似した「川」の字屍床配置をとる横穴式石室となる。現地での観察では石材Cは、それ程高さも無く、端部は丸みをもち特に加工はされていないので、一般的石障のような加工はないと考える。9号墳・10号墳では既に石棺石材に加工を施しているため、立地から考えると7号墳の石室において加工が施されないのは不思議である。また千崎5号墳と7号墳の先後関係は立地からは微妙であるが、石室構造の変化からは千崎5号墳から7号墳に変遷したと考えたい。同じ川字配置の竹島3号墳も、その立地から更に遡る石室の存在が想定されているが、それは千崎5号墳のような石室かもしれない。



1 千崎古墳群分布図 (1/2,500)

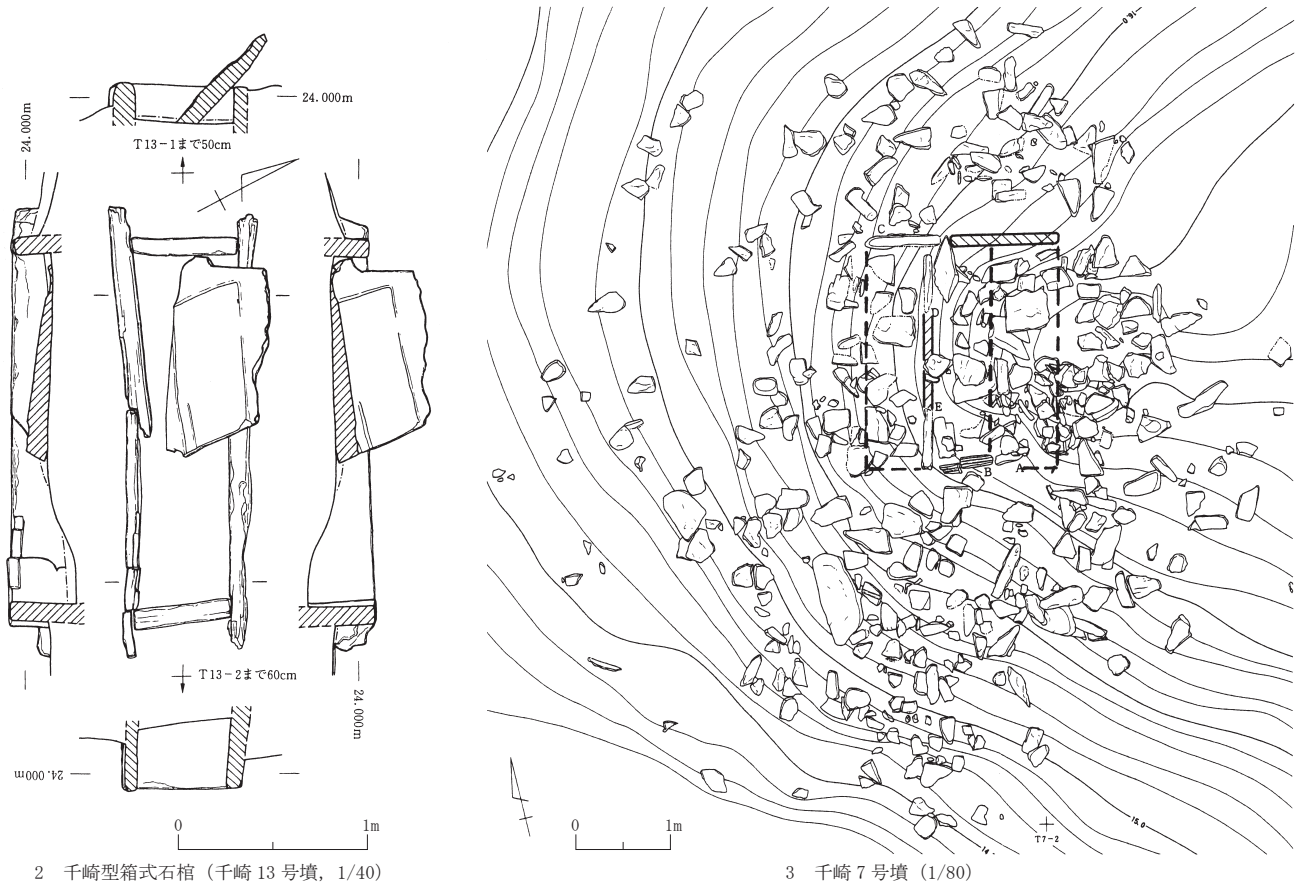
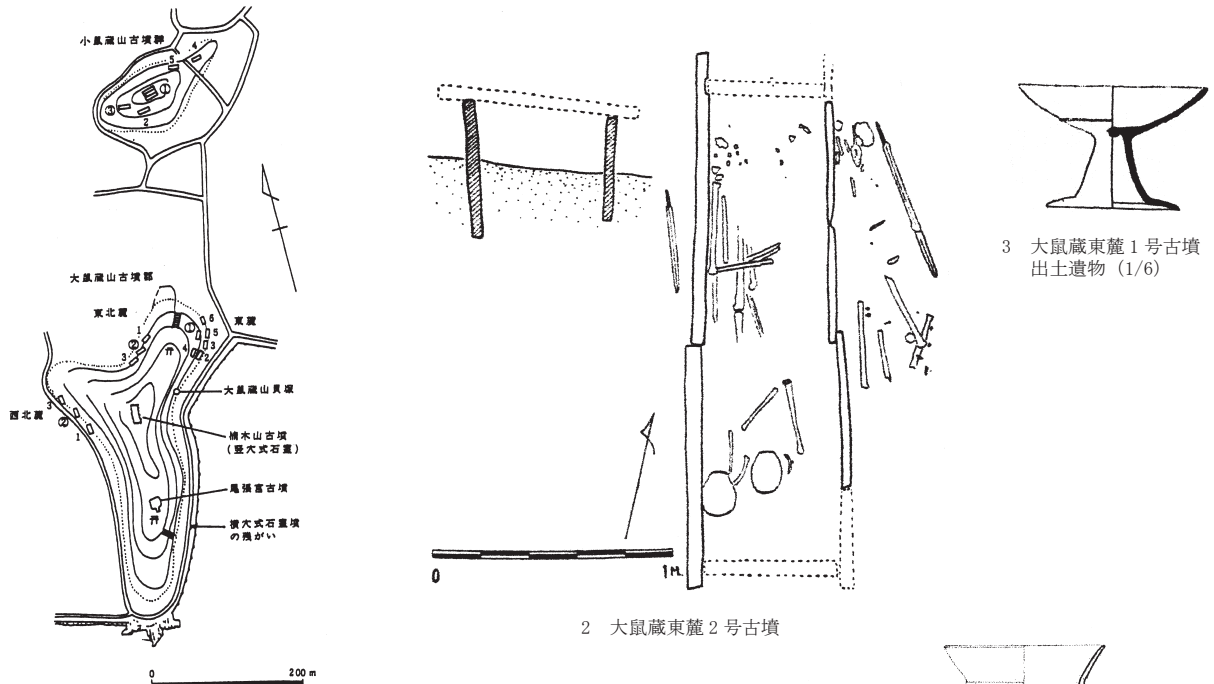


図2 千崎古墳群分布図及び石棺・石室実測図

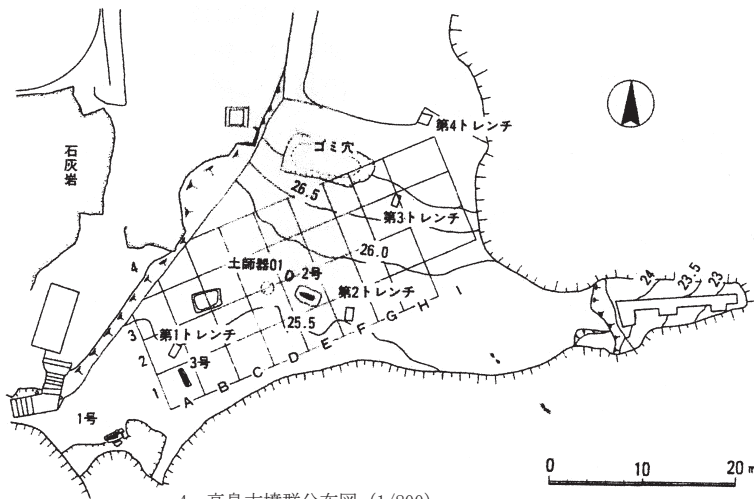
詳細の判明する出土遺物は少ないものの、千崎10号墳の棺外から直刃鎌、袋状鉄斧、鉈、刀子のミニチュア鉄器が出土しており、古墳時代前期後半から中期前半頃とされている。

(2) 大鼠蔵古墳群・小鼠蔵山古墳群

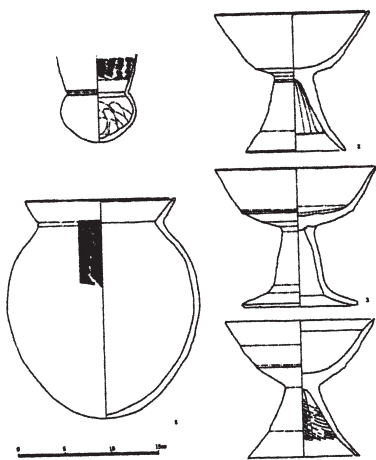
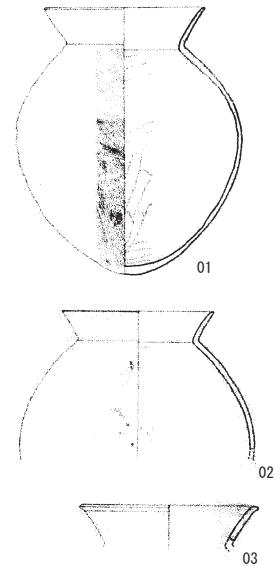
本来は八代海に浮かぶ小島で、いずれも八代市に所在する。大鼠蔵古墳群では、2箇所の頂き部にそれぞれ竪穴式石槨を有する楠木山古墳と石障系石室である大鼠蔵尾張宮古墳が立地し、島の東、東北、西北の斜



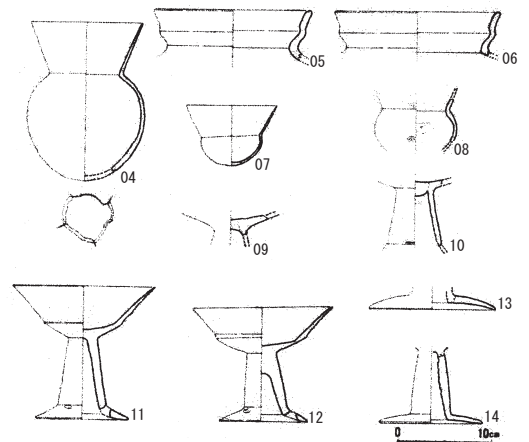
1 大嵐蔵・小嵐蔵山古墳群分布図 (1/10,000)



4 高島古墳群分布図 (1/800)



6 大見観音崎石棺群出土遺物 (1/6)



5 高島古墳群出土遺物 (1/6)

図3 大嵐蔵・小嵐蔵山古墳群、高島古墳群分布図及び出土遺物



面や裾部に箱式石棺が立地する。乙益重隆氏の報告〔乙益 1956〕と、熊本県装飾古墳総合調査報告書で江上敏勝氏が報告されている「大蔵東麓1号古墳」〔高木正編 1984〕とでは、箱式石棺番号に相違がある。熊本県装飾古墳総合調査報告書掲載の分布図を使用しているため、江上氏の番号で論を進める。記載された出土遺物から判断すると、江上氏の1号古墳が乙益氏の第3号棺に該当し、2号古墳は乙益氏の第2号棺に、3号古墳が乙益氏の第2号棺の（東）棺外葬に、4号古墳が乙益氏の第2号棺の（西）棺外に、5号古墳が乙益氏の1号石棺に該当すると考えられる。

表1 高島古墳群土器出土区

土器番号	出土区	土器番号	出土区
01	D-2	08	C-2
02	I-4	09	C-2
03	D-2	10	D-2
04	I-4	11	I-4
05	I-4	12	I-4
06	I-4	13	D-2
07	I-4	14	C-1

分布図（図3-1）から考えると最初に楠木山古墳、ついで大蔵尾張宮古墳が造られ、その後東麓の装飾を有する1号古墳や、東北麓の3基の古墳が造られたと思われる。また小蔵山古墳群では最初に小蔵1号墳が築造されたと考える。この立地は当然階層差でもあるが、最初に上位階層が墓を造ることで、古墳群が形成されることを考えれば、頂部にある石室と周囲の石棺の関係は時期差でもあったと考える。ここまで明確な占地ではないが、田川内古墳群も同様にまず横穴式石室である第1号墳が築造されたと思われる。

大蔵東麓1号古墳は、既に破壊され詳細は不明であるが、主軸を南北にとり、箱式石棺であったと言われている<sup>(2)</sup>。板石9枚で構成され、西側側壁には、弓・短甲・刀子・鏡を表現した装飾が刻まれている。時期決定の手がかりになるものは、この1号古墳から出土したと言われている高坏である（図3-3）。1点のみなので、時期比定の決め手には出来ないが、林田編年のⅢ期（5世紀前半）と考えられる〔林田 2002〕。その他東麓の石棺から鉄鏃や剣、刀子、櫛などが出土している。

### （3）高島古墳群

八代市に所在し、本来は八代海に浮かぶ小島で、島の南東側から箱式石棺が3基検出されている（図3-4）。1号石棺のみ石材が安山岩で、石棺の主軸が他の2基と大きく異なる。残りの2号・3号は砂岩であるが、3号石棺は、身の小口1石だけの残存である。2号石棺は、千崎型箱式石棺で、蓋石裏面には、身と接する部分に浅く溝が彫りくぼめられている。立地からは、2号石棺が先行するようである。

遺物は、石棺内ではなく、周辺から土師器が出土している（表1、図3-5）。特に遺物の集中しているI-4区であるが、その地区の北や東側は既に開発を受けているので、I-4区の遺物はどのような石棺に伴っていたか不明である。しかしD-2区から出土した土師器（01・03・10・13）は2号石棺に伴うものと考えてもいいのではないだろうか。そうであるなら、林田編年のⅠ～Ⅲ期（4世紀末から5世紀前半）の時期に比定できる。この時期には既に蓋石の裏に溝を掘り込む技術が存在したことになる。なお、I-4区は若干先行する可能性がある。

### （4）大見観音崎石棺群・要古墳群・重盛山古墳群

その他宇土半島に所在する宇城市大見観音崎石棺群は、二つの丘陵がありそれぞれに石棺が位置する。特に北側の丘陵高所に円墳が位置し、その斜面に箱式石棺が位置する。遺物としては、丘陵南側の2号石棺と4号石棺の間のL字状溝から土師器が出土している（図3-6）。林田編年のⅠ期（4世紀末から5世紀初頭）に該当する。なお2号石棺は詳細不明、4号石棺は、溝状の加工は施されていないようである。

同じ宇城市要古墳群の箱式石棺の分布からは、5・6号次いで3・4号、さらに2号となる。2号の石材は安山岩で、他は砂岩が主体である。6号は残存状態が悪く不明だが、5号天井石内面に溝が彫られており、千崎型箱式石棺である。一方3・4号には、溝状加工は認められない。以上から、特に砂岩製石棺と比べて安山岩製の石棺が古いということはないようである。また溝を施す石棺が出現した後も、溝を施さない石棺

があるなど、これも必ずしも時期差とは言えないようである。

詳細な分布図は示されていないが、宇城市重盛山古墳群では、丘陵頂部標高約 50m 地点に石障系石室である重盛山 1 号古墳（陣内古墳）が立地し、1 号墳の南約 100m の丘陵斜面（標高約 30m）に箱式石棺である 3 号墳が位置する。この 3 号古墳の蓋石裏面には溝が彫られている。

### （5）小結

千崎型箱式石棺の加工技術は遅くとも 4 世紀末から 5 世紀前半代には成立しているが、要古墳群の例をみるとそれ以降すべての箱式石棺に施されるものではないようである。一方大鼠蔵尾張宮古墳も、大鼠蔵東麓 1 号古墳より先行するので、遅くとも 5 世紀前半には出現している可能性が高い。以上からは、溝状加工技術が箱式石棺と石障系石室のどちらに早く出現するか断定はできない。

千崎古墳群における横穴式石室と箱式石棺の関係は、階層差ではなく、時期差の可能性が高い。一方大鼠蔵古墳群の尾張宮古墳や小鼠蔵山古墳群の 1 号古墳とその他の箱式石棺は、階層差であろう。しかし、前述したように頂部にある石室と周囲の石棺の関係は時期差でもありと考える。その他大見観音崎石棺群と円墳である大見観音崎 2 号墳との関係、重盛山古墳群の重盛山古墳と箱式石棺の関係などを見ると頂部に墳丘をもつ古墳が位置し、その周辺に箱式石棺が位置する。これらも大鼠蔵古墳群などと同じく、階層差でもあり時期差でもあり。つまり明確な墳丘をもつ古墳と箱式石棺が共存する場合は、まず頂部など高所に墳丘墓が存在し、その周囲に箱式石棺が築造されることが多い。その点では千崎古墳群は非常に特殊である。

千崎古墳群の横穴式石室と大鼠蔵尾張宮古墳や小鼠蔵 1 号古墳の違いは、石障或いは石障加工の有無、装飾の有無であり、そこに階層的な違いがあるのかもしれない。また同じ箱式石棺についても、装飾の有無、溝加工の有無に階層差があるのかもしれない。

## 2 石障系石室の変遷と問題点について

### （1）石障系石室の変遷

石障系石室の変遷については、前述したとおり高木恭二氏によって明らかにされている [高木恭 1994]。それは、玄室から羨道部への接続状態など出入口部の構造に特に顕著であり、それは以下のとおりである。

- ・羨道から玄室への接続状態：小鼠蔵 1 号墳は、極端な例であるが、大鼠蔵尾張宮古墳のように、玄室床面より、羨道床面の高さが一段高くなるものから、田川内 1 号古墳のように羨道と玄室の床面が同じ高さのものへ変化する。
- ・前障中央部の刳込：小鼠蔵 1 号墳のように抉りの無いものから、大鼠蔵尾張宮古墳などのように浅い抉りのあるものへ、更に田川内 1 号墳のような深い抉りのあるものへと変化する。

このことについて、6 つの画期を設置したことがある [古城 2007]。その中で本論に関係する 1 期、2 期については以下のとおりである。

- 1 期：横穴式石室の導入期であり、現在のところ、小鼠蔵 1 号墳だけである。出入口部が異常に高い位置にあり、玄室床面と 120cm の高低差がある。屍床配置は「川」の字であるが、遺体安置場所は、中央である。
- 2 期：屍床配置は「川」の字であるが、中央部は通路となり両脇が遺体安置場所となる。羨道部を割石平積で造りだす。羨道と玄室床面の高低差は 60 ～ 30cm 程度である。また前障に浅い抉りを施す。前障の抉りの極浅いもの（大鼠蔵尾張宮古墳・大戸鼻北古墳）とはっきりとした抉りのあるもの（長砂連古墳・小田良古墳）の 2 つに細分できる。

以上から、小鼠蔵1号墳を肥後における最古の横穴式石室に位置づけ、続いて大鼠蔵尾張宮古墳・大戸鼻北古墳とした。しかし杉井氏も指摘しているとおり小鼠蔵1号墳と大鼠蔵尾張宮古墳や大戸鼻北古墳との間にはその変遷には飛躍がある。

### (2) 小鼠蔵1号墳の問題点 (図4-3)

3点の疑問点がある。まず1点目として本当に横穴式石室であるのか、現在の開口部は本当に横口部なのかである。表2は初現期の横穴式石室横口部の規模であるが、小鼠蔵1号墳と谷口古墳(図4-1)だけ大きく数値が異なる。小鼠蔵1号墳は横口部の位置が玄室床面より120cmとあまりにも高い。逆に横口自体の高さは狭く、40cm程度で最大でも50cm程度である。

2点目は、入り口の真下に屍床(箱式石棺)があることである。余程注意しないと玄室に入る際屍床に足を踏み入れてしまう。或いは横口の形だけを真似ただけだったのかも知れない。蛇足だが、「川」の字形屍床配置の中央に箱式石棺がある形態は、大鼠蔵東麓の2号古墳(箱式石棺)と棺外(2号石棺の東棺外と西棺外)を連想させる(図3-2)。

3点目として石障系石室の初現とした場合、あまりにも完成した形で出現している点である。その前段階の石室が想定できないことがある。強いてあげれば竪穴式石槨内に蓋のない箱式石棺を配置する成合津2号墳(図4-2)であろうが、小鼠蔵1号墳との間には最低でももう一段階何らかの石室の存在があつてよさそうである。

### (3) 石障系石室の成立 (図5)

小鼠蔵1号墳を特異な例として保留するならば、石障系石室の変遷をスムーズに考えることができる。それは千崎5号墳のような羨道側からみて右側1箇所の屍床配置から、竹島3号墳のような「川」の字形の屍床配置に変わり、更に大鼠蔵尾張宮古墳のような定型化した石障系石室が完成するという変遷である。すでに千崎5号墳では、高さの無い腰石を配置することにより、玄室のプランを確定し、一定の高さまで石材をほぼ垂直に積み上げる。次いで四隅に隅角消しの石材を配置する。また隅角消しの石材の上から持送りを始める[山野・有馬編2008]。それをより加工された石障を用いることにより、平面プランを決定し、より効率的に内部を区画し、屍床を設ける。石障の背後から石材をほぼ垂直に積み上げ、次いで石障の高さになったら四隅に隅角消しの石材を配置する。また隅角消し石材の上から持送りを始める等、石障は構築の目印にもなる。また装飾を施すことも可能となる。まさに一石二鳥以上の効果である。また千崎5号墳の羨道部の床面は、玄室側は板石が敷かれており、大鼠蔵尾張宮古墳や大戸鼻北古墳の羨道床面にも板石が敷かれており共通する。球磨川下流域の大鼠蔵尾張宮古墳や田川内1号墳は、袖石が突出しない羨道形態であり、天草の大戸鼻北古墳は、袖石が突出したような形態ですぐに前庭部となり、両者に違いがある。これも既に千崎5号墳と竹島3号墳でその違いが現れており、千崎5号墳(或いは千崎7号墳)から大鼠蔵尾張宮古墳への変遷、竹島3号墳から大戸鼻北古墳への変遷が想定できる。

その他、熊本市城南町塚原古墳群内のりゅうがん塚古墳や將軍塚古墳についても、直接結ぶ付くものではないかもしれないが、千崎5号墳のような玄室右側に屍床を設ける配置からの変遷が辿れるのではなかろうか。つまり肥後における横穴式石室の最古段階として千崎5号墳を位置づけることはできないだろうか。

表2 初期横穴式石室横口部の規模

古墳名	横口部規模 (cm)			
	玄室床面からの高さ	幅	高さ	奥行き
鋤崎古墳	40	60	140	50
老司3号墳	55	85	70+ α	
横田下古墳	40 ?	50	140	90
谷口古墳東	170		30 ?	30 ?
別当塚古墳	30~40			
城2号墳	60	60	90	40
千崎5号墳	4	30~43	60+ α	59
竹島3号墳	30	40 ?	80+ α	30 ?
大戸鼻北古墳	45~50	40	90	40
大鼠蔵尾張宮古墳	60	50	100	70
小鼠蔵1号墳	120	80 ?	50以下	

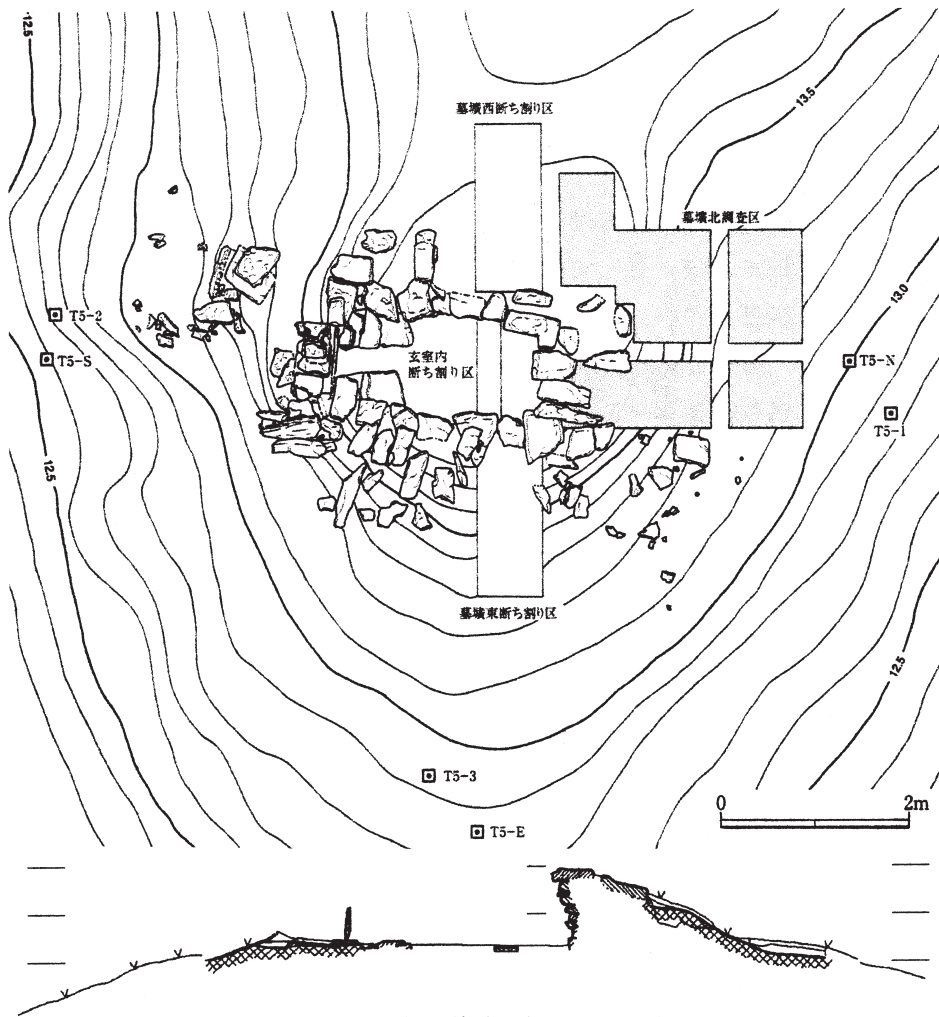
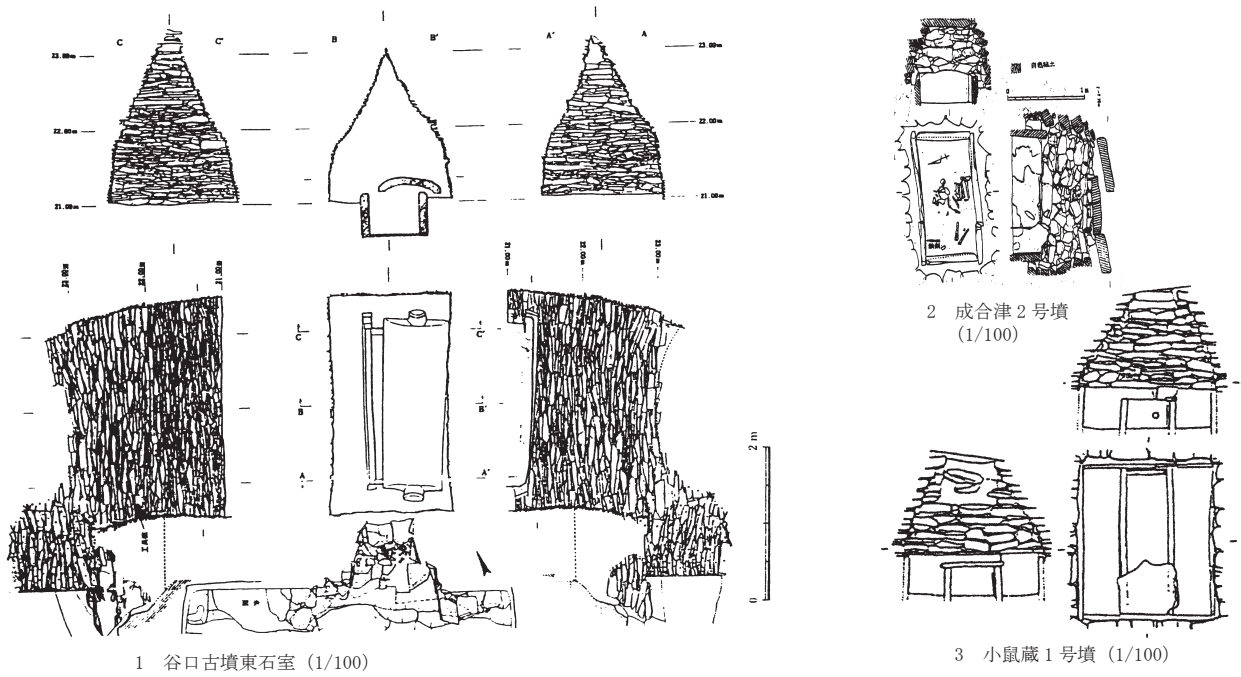


図4 谷口古墳・成合津2号墳・小鼠蔵1号墳・千崎5号墳の石室



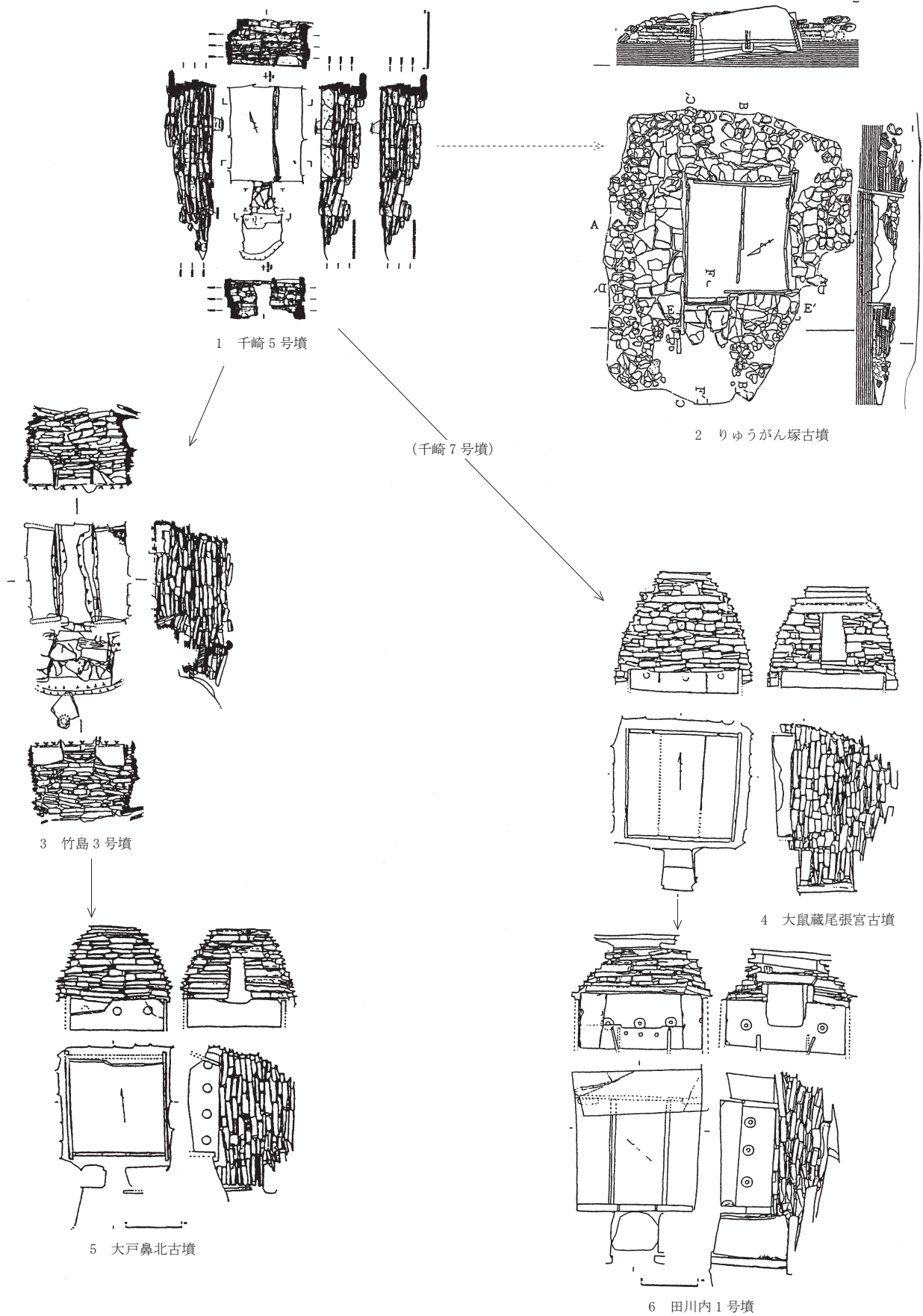


図5 初期横穴式石室変遷試案 (すべて1/100)

しかしいくつかの疑問点・問題点もある。

1つは、羨道と玄室床面の高低差の問題である。当初羨道は石室の比較的高い位置に付き、玄室床面と高低差があり、次第にその段差が解消されるので、編年の指標にもなっている。ところが千崎5号墳は、4cm程羨道側が高いだけであり、他の初期の横穴式石室と大きく違う。このことについて、その場所の土質や地形により高低差は左右されることもあり得ると考えている。具体的には、千崎5号墳の石室主軸は尾根に直交する。その尾根幅は狭く、特に羨道側は傾斜が急で、墓壙を掘る場合、羨道側は十分な深さが確保出来ず、玄室床面とほぼ同じ高さになってしまったごく稀なケースと考える（図4-4<sup>(3)</sup>）。

2つ目は、千崎古墳群では7号墳が出現する前に8・9・10号石棺で、溝状加工技術が確立している。それなら何故、7号墳で加工された石障が出現しないのかという疑問である。本来石障は、巨大な板石を丁寧に加工したものを組み合わせたものである。そこには、巨石の入手、また加工する技術や労力が必要になる。つまり箱式石棺より上位の埋葬施設と考える。ところが千崎古墳群に限っては、横穴式石室は上位の埋葬施設との認識がないため、そこまで精巧な加工はしなかったのではないかと。とは言え、石室構築には、一般の箱式石棺よりは石材の入手や石積みに労力や技術が必要であり、その点は更なる検討課題である。想像をたくましくすれば千崎古墳群では、製品化する前の試作品として横穴式石室を造ったとは考えられないだろうか。

この石障系石室成立以前に、穹窿形天井を構築する技術や横口部設置の技術は千崎5号墳の段階で確立していた。横口部については、鋤崎古墳や城2号墳など北部九州型石室からの影響が考えられる。穹窿形天井については例えば石棺系石室の中でも幅の広い石室に天井を架け渡すことから発生した技術と北部九州の持送り技法が融合したものかもしれないが、明確な回答はもたない。

## おわりに

千崎5号墳を初現として、次の千崎7号墳や竹島3号墳を介して、より効率的に玄室内に屍床を設けるため、併せて玄室平面プランを確定させ、石室構築の目安とするために、板石で囲む発想が生まれた。また千崎5号墳で横口構造の発想を受け入れ、石材加工等の技術力を備えたことで、石障系石室が成立したのではないだろうか。よって大蔵蔵尾張宮古墳は、当初から完成した形の石障系石室として出現するのではないかと結論づけた。

しかし多くの問題が残されたままである。千崎型箱式石棺に伴う加工技術の出現時期も、未確定である。今後より多くの事例を検証する必要がある。箱式石棺の場合、出土遺物が少ないことに加え、石棺本体のみの調査で終了している場合が多く、石棺周辺に供献土器がある場合でも見逃されている可能性がある。

また最大の問題は、小蔵蔵1号墳の位置づけが確定していないことである。谷口古墳の横口部に類似することや、高木氏の石材使用の観点から、肥後における最古の横穴式石室とする可能性も捨てきれない。谷口古墳のように、竪穴式石槨に単に横口を付けただけで、他の横穴式石室の系譜につながらないものと位置づけ出来ればいいのだろうが、小蔵蔵1号墳は、石障があり、天井形態も球磨川下流域の石障系石室と共通するものである。<sup>(4)</sup>やはり横口部の構造がどのようなものか、正式な調査が必要であろう。

今回の石障系石室の成立過程はあくまで試案として提示したものである。また横穴式石室の成立は、多くの要素が影響しあっており、一元的に捉えることには問題があるのかもしれない。今後より検証していきたい。

本稿をなすにあたり吉永明氏、山内淳司氏、西山由美子氏の協力を賜った。記して感謝申し上げます。その際、産島古墳の実測図まで見せて頂いたが、力量不足で言及できなかったことをお詫び申し上げます。

## 註

- (1) 千崎型箱式石棺とは、砂岩製で、長側石小口部分に溝状加工を施す。石材を継ぐ場合、カギ状タイプであるという特徴を持つもので、千崎古墳群とその周辺に限られる〔島津屋 2009〕。今回は、一つの石棺の一部に砂岩以外の石材が使用されているものや、身には溝状加工は認められず、天井石に溝状加工を施されたものも千崎型箱式石棺としている。
- (2) 大鼠蔵東麓1号古墳の石材は安山岩質と報告されているが、池田朋生氏より砂岩であるとの御教示を受けた。
- (3) 一般的には、羨道と玄室床面の段差は石室変遷の指標として現在も有効であると考えている。
- (4) 球磨川下流域の大鼠蔵尾張宮古墳・小鼠蔵1号墳・田川内1号墳では、共に隅角を消し壁面を構成しているが、天井直下数段の石材は、大型の石材を使用し、それを四方から急激に持ち送っている。特に天井直下は各壁面一石で構成しているので、天井を見上げると四角形のように見える。この天井構造は地域性と考えているが、年代的にもさほど差が無いのかもしれない。

## 引用・参考文献

- 池田朋生 2013「天草産出の砂岩を対象とした文化財石材の研究―上天草市維和島とその周辺で営まれた石工業から―」『先史学・考古学研究と地域・社会・文化論』高橋信武退職記念論集編集委員会：pp. 159-173
- 一本尚之・高濱美来編 2009「千崎古墳群第7次調査報告」『考古学研究室報告』第44集、熊本大学文学部考古学研究室
- 乙益重隆 1956「八代市大鼠蔵山古墳―肥後における箱式石棺内合葬の例について―」『考古学雑誌』第41巻第4号、日本考古学会：pp. 43-53
- 甲元眞之編 1986「宇土半島古墳群分布調査報告・(郡浦・戸馳・三角・大岳地区)」『三角町文化財調査報告』第6集、熊本県三角町教育委員会
- 島津屋寛 2009「熊本県下の古墳時代箱式石棺」『八代海沿岸地域における古墳時代在地墓制の発達過程に関する基礎的研究』2006年度～2008年度科学研究費補助金(基礎研究C)研究成果報告書、熊本大学文学部：pp. 125-156
- 杉井 健 2009「八代海沿岸地域における古墳時代在地墓制の特質とその検討課題」『八代海沿岸地域における古墳時代在地墓制の発達過程に関する基礎的研究』2006年度～2008年度科学研究費補助金(基礎研究C)研究成果報告書、熊本大学文学部：pp. 231-238
- 杉山富雄編 2002「鋤崎古墳」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第730集、福岡市教育委員会
- 高木恭二 1994「石障系石室の成立と変遷」『宮嶋クリエイト』第6号、宮嶋利治学術財団：pp. 109-132
- 高木恭二 1999「横穴式石室の石材―石障系横穴式石室の事例を中心に―」『九州における横穴式石室の導入と展開』第2回九州前方後円墳研究会資料集：pp. 695-705
- 高木正文編 1984『熊本県装飾古墳総合調査報告書』熊本県文化財調査報告第68集、熊本県教育委員会
- 高木正文 1999「肥後における装飾古墳の展開」『国立歴史民俗博物館研究報告』第80集、国立歴史民俗博物館：pp. 97-150
- 谷口義介 1990「第11章 天草における横穴式石室墳の展開―有明町竹島3・4号墳を中心に―」『総合研究 天草』熊本商科大学産業経営研究所研究業所17、熊本商科大学附属産業経営研究所
- 野田拓治 1982「古式土師器の成立と展開―特に中部九州における編年試案―」『森貞次郎博士古稀記念 古文化論集』下巻、森貞次郎博士古稀記念論文集刊行会：pp. 947-987
- 林田和人 2002「肥後における中・後期の様相」『古墳時代中・後期の土師器―その編年と地域性―』第5回九州前方後円墳研究会発表資料、九州前方後円墳研究会：pp. 117-144
- 古城史雄 2007「肥後の横穴式石室について」『日本考古学協会2007年度熊本大会発表資料集』：pp. 35-55
- 前田真由子編 2006「千崎古墳群第4次調査報告」『考古学研究室報告』第41集、熊本大学文学部考古学研究室
- 三好栄太郎・仙波靖子編 2007「千崎古墳群第5次調査報告」『考古学研究室報告』第42集、熊本大学文学部考古学研究室
- 村井真輝・浦田信智 1982「大見観音崎石棺群・大串古墳・要古墳群」『熊本県文化財調査報告』第57集、熊本県教育委員会
- 森幸一郎編 2005「千崎古墳群第2次・第3次調査報告」『考古学研究室報告』第40集、熊本大学文学部考古学研究室
- 山野ケン陽次郎・有馬絢子編 2008「千崎古墳群第6次調査報告」『考古学研究室報告』第43集、熊本大学文学部考古学研究室
- 吉永 明 1991「高島古墳群」『八代市文化財調査報告書』第5集、八代市教育委員会

#### 挿図出典

図1：筆者作成

図2-1：森編 2005 に加筆、図2-2：森編 2005、図2-3：前田編 2006 に斜線及び点線部分を加筆

図3-1：高木正編 1984、図3-2・図3-3：乙益 1965、図3-4・図3-5：吉永 1991 第14図、図3-6：村井・浦田 1982

図4-1：『九州における横穴式石室の導入と展開』第2回九州前方後円墳研究会資料集、図4-2：阿部堅二他 1977「熊本県天草郡成合津古墳調査概報」『熊本史学』第50号、図4-3：高木正編 1984、図4-4：山野・有馬編 2008 及び一本・高濱編 2009 に加筆、再トレース

図5-1：一本・高濱編 2009、図5-2：古城 2007、図5-3：谷口 1990、図5-4・5-5・5-6：高木正編 1984

#### 追記

脱稿後、南さつま市奥山古墳の存在を失念していたことに気づいた。奥山古墳は、主体部に千崎型箱式石棺を有する円墳で、周溝から古墳時代前期後葉に比定される土師器が出土している。現在のところ、千崎型箱式石棺の出現時期としては最も遡る事例である。

文献：橋本達也・藤井大祐・甲斐康大編 2009『薩摩加世田 奥山古墳の研究』鹿児島大学総合研究博物館研究報告 No. 4  
鹿児島大学総合研究博物館